

探究的な学習を充実させる総合的な学習の時間の単元展開

—学年の系統に応じた内容と言語活動の充実—

進藤 弓枝

21世紀は、グローバル化が進み、情報が溢れ、答えのない課題や未だかつて出会ったことのない課題に直面するであろう「多文化共生の時代」といわれる。この時代を生きる子どもには「社会を生き抜く力」つまり「生きる力」が求められる。総合的な学習の時間（以下「総合」）は、この「生きる力」を育成する中核とならなければならない。そこで、昨年度の研究を踏まえ、教育課程における「総合」の実態や教員の意識について調査し、探究的な学習が充実するための単元展開について明らかにした。

第1章 探究的な学習を充実させる総合的な学習の時間

第1節 教育課程において求められている総合的な学習の時間の方向

社会の急激な変化に伴い、大学においても近年、「アクティブ・ラーニング」と総称される課題解決型の学習形態が盛んに導入されるようになってきた。このような中、平成23年4月、小学校において教育課程が改訂され、「総合」は新たに第5章として独立し、「探究的な学習」となることが目標に明確に位置付けられた。

「総合」では、答えが一つに定まらない問題、容易には解決に至らない問題を扱う。それが、自分たちの住むまちの魅力であったり、生き方の問題であったりする。「総合」は、「何を学ぶのか」よりも「どのように学ぶのか」という探究の過程を重視している。探究の過程を繰り返すことで、「学び方」や「課題や対象についての明確な考えを表現すること」を学ぶと同時に、生きる力を育む。

教育課程が改訂されて1年目の実施の状況について、本市の小学校全173校で作成された「平成23年度 総合的な学習の時間 全体計画（京都市教育委員会による調査）」（以下、実施状況調査）を基に、「具体的な学習活動」「学習活動にあてる時間数」「他教科等との関連」の三つの視点から整理、分析した。

第2節 探究的な学習を充実させるための課題

実施状況調査の結果からみてきた本市の課題について、「単元構想」「学習過程」の二つの面から考えた。

単元構想をする上で、単元の時間数と内容、他教科等との関連などを意識することが求められる。また、学習過程上に適切に言語活動を位置付け、思考する活動を充実させることが重要であることがわかった。

第2章 探究的な学習の充実をめざした単元構想と評価

第1節 総合的な学習の時間における問題意識の調査

平成24年7月27日に実施された「生活科・総合的な学習教育指導講座」に参加した本市の教員85名を対象に、アンケート調査を実施した。その結果、「各教科等との関連・学年の系統性」や「単元の構想・単元づくり」「コミュニティティーチャー」等の課題がみえた。中でも、教員が最も課題と感じているのが「評価」であることが明らかになった。

第2節 探究的な学習の充実をめざした単元構想の視点

探究的な学習を充実させるための視点として以下の3点をあげた。

- 学年の系統化を図る
- 協同的な学びの場を設定する
- 探究的な学習を確実にする学習過程をつくる

「学年の系統化」については、「内容」と「付けたい力」の両面から明らかにし、学校として系統的に行っていくことが大切である。

「協同的な学びの場」については、「協働的な学び」と「支援を受けての学び」に大別し、協働的な学びのプロセス「パーソナルワーク→グループワーク→クラスワーク」を提案する。また、支援を受けての学びについては、コミュニティティーチャーと目的を共有することが大切である。

「探究的な学習を確実にする学習過程」については、右に示す「八つの学習過程」を新たに提案する。

- 1 事象と出会う
- 2 学習課題を決める
- 3 予想・仮説を立てる
- 4 学習計画を立てる
- 5 調査する（記録する）
- 6 課題を解決する
- 7 調査したことを報告する
- 8 学習を振り返る

第3節 探究的な学習の充実をめざした評価の視点

評価のプロセスを提示し、評価方法の工夫について提案する。評価の観点を設定し、子どものあるべき姿を系統的に示すことで、付きたい力が段階的に育成できるとともに、評価もしやすくなる。指導と評価の一体化が大切である。

第3章 学年の系統に応じた単元展開と評価の実際

研究協力校の第3学年で環境をテーマにした単元「こん虫パラダイス」、第6学年で福祉をテーマにした単元「12歳の自分」の実践を行い、筆者が第2章で提案した「単元展開」と「評価」について検証を行った。

第1節 探究的な学習を充実させる単元展開

○協同的な学びの場の設定

「パーソナルワーク→グループワーク→クラスワーク」というプロセスを基に「協働的な学び」の場を設定することで、思考が深まると同時に、望ましい人間関係が育った。このとき、KJ法やウェビングマップの手法を取り入れ、交流の方法を工夫したことも効果的であった。

「支援を受けての学び」も、体験活動を重視する「総合」において有効な学習であることが明らかとなった。

○学習過程

八つの学習過程を設定することで、細かなステップで単元を展開することができた。小さな疑問が、活動を重ねるうちに、単元をつらぬく課題となり、その課題を解決するために新たな課題が生まれ、探究的な学習が深まっていった。

○言語活動

「整理・分析」の過程で、「地図に表して考える」「座標軸・ベン図に表して考える」の実践を行った。収集した情報を、地図や座標軸、ベン図というツールを活用して整理することで、比較したり関連付けたりといった思考を働かせやすくなり、学習が充実した。

「まとめ・表現」の過程では、「ポスターセッション」の実践を行った。その結果、自分たちの学びを効果的に表現することができたと同時に、ポスターセッションの利点を実感することができた。

○学年の系統性

各学年によって各教科等での既習の内容や既有的知識・技能が違う。このことを踏まえ、学年の系統に応じて活動の内容や展開の仕方を考えることが求められる。

第2節 探究的な学習を充実させる評価

「育てようとする資質や能力及び態度」を踏まえ、小学校第3学年から中学校までの学年に応じた「付きたい力の系統表」を作成した。この系統表を基に、単元の評価規準を設定し、指導と評価の計画を立てた。

計画を基に、「思考力」「学び合う力」「表現力」についての評価を行った。その結果、評価規準を設定し評価の方法を明らかにすることで、評価がしやすくなり、一人一人の子どもに適切な支援をすることができた。

第4章 総合的な学習の時間のさらなる充実のために

第1節 研究の成果と課題

八つの学習過程を示すことで、一つ一つの学習活動のめあてが明らかとなり、充実した活動を行うことができた。学習過程を細かく設定することで、子どもは学習の見通しがもてる。このことは、主体的に学ぶ上で必要不可欠であると考えられる。また、教師の適切な支援によって、協同的な学びが充実するとともに、思考も深まった。

教師と子どもの両者が「内容」と「知識・技能」において学年の系統性と教科等との関連を意識することで、子どもは様々な場面で学びの有用性を実感することができた。そしてこれらの学びが実社会、実生活と密接につながっていることに気付いた。

どちらの実践においても、課題はみられたものの、その時々に応じ、どうすれば子どもに充実した学びを保障できるかを考え、柔軟に対処することが大切であることがわかった。そのような教師の姿勢が、子どもの学びを充実させるのである。

第2節 生きる力を育む総合的な学習の時間

学習の主体者は子どもである。子どもが主体的に学ぶことで、探究的な学習が充実する。探究的な学習が充実することで、「生きる力」が育成されていく。

「総合」だけで「生きる力」を育成するのではない。内容や知識・技能、言語活動において横断的、合科的、総合的に各教科等と関連させながら探究的な学習を展開することが重要である。また、全ての教科等で、主体的な学習活動と多様な言語活動を展開することで、思考力・判断力・表現力や言語能力などを育成することが大切である。そのためには、教師一人一人がそのことを意識し、授業を改善することはもちろんのこと、学校全体で取り組むことが求められる。